

# 蕨の造形

## 小説『四角な船』の視点

工藤 茂

井上靖の小説『四角な船』は、次のような小説である。

R新聞社の社会部記者丸子東平は、九月に行われた大学の同窓会で、友人の田代光太郎からノアの洪水の再来を信じている狂人の話を耳に入れ、湖北通信部の耳無の案内で、その狂人蕨家の若の依頼を受けて船を造ろうとしている船大工の勘左工門に会うが、明日来てくれと言われる。場所は琵琶湖の西、今津の近くの湖畔であった。(湖畔の村)

丸子は翌朝、勘左に案内されて、蕨の家に行く。辺り一面魍魎魍魎の棲家に見える屋敷の中に若はいた。若にやっと会うことのできた丸子の眼に、若は正常な、しかも頭のきれいな大学教授のように映った。勘左のせいで、ついに洪水のことを聞くことのできなかった丸子は、その夜、勘左の家に泊ることになる。ところがその夜、蕨家のおたきさんから、緊急の電話がかかってきた。蕨が突然家出をしたというのである。

しかもそればかりではない。何か異常事態が発生したらしい。急いで行ってみると、家には大きな牛が一頭と鶏五羽が入っていた。おたきさんの話によると、蕨は一通の手紙を残しており、それにはその牛と鶏とを船に乗せるように指示してあったという。牛を牧場に引き取ってもらい、鶏を庭に追い出して一段落した時、蕨の手紙はそのどさくさに紛れて失くなっていた。丸子はあらためて蕨の狂気を思い知らされると同時に、蕨にすっかりやられてしまった、と思うのであった。(しらゆう花)

丸子は多忙な日々を送りながら、自分の仕事にむなしさを覚え、ふと蕨のことを考えている自分を発見して、蕨の影響によって自分が変化していることを思い知らされる。そこで勘左をたずねる。勘左は箱船の構造について丸子に相談する。その時、犬も乗せると蕨が言ったことから、丸子は勘左を問いつめ、佐渡の刈浦茂平宅から蕨の手紙が出されている

ことをつきとめる。(風)

丸子は蠶を追って佐渡に行き刈浦茂平に会う。だが蠶はその朝、東京へ行くと言って、すでに刈浦家を出た後であった。その家には一人の老婆がいた。生まれつき目が見えなかつたが、心の目でももの本質を見通す能力を持っていた。丸子は浜辺の陽だまりで網をつくらつてゐるその老婆に会つた。彼女は蠶からもらったというカメオを持っており、その中には一枚の紙片が入っていた。(陽だまり)

丸子は同僚の瀬宮から、蠶が学生の時から少し変だつたこと、経済を出て西洋史に入り直し、大学院では古代史をやり、その頃から少しずつ狂い出してゐたことを聞く。そして、老婆のカメオに入つてゐた紙片を瀬宮に渡して調べてもらつたことにする。数日後瀬宮は丸子に紙片を返し、そこに書かれていた文字がアツカド文字で、汝、船に乗れの意だと告げる。そんなある日、丸子は勘左から電話で蠶の東京の住所を知らされる。たずねて行つてみると蠶の姿はすでに無く、七条みやこ、みどり母子に会う。みやこはみどりが後世偉大な音楽家になると予言した蠶のことばを信じ、実の子ではないみどりを音楽家に育てようと懸命になつてゐる。そのみどりの首に佐渡の老婆が蠶からもらったカメオと同じカメオがぶら下つてゐるのを、丸子は発見する。(古代文字)

それ以来丸子は、しばしば七条親子の訪問を受けるようになる。そのようなある日、勘左の内儀さんからの電話と、耳無からの電話が入る。勘左が大変だといふのである。そこで

丸子はまた列車に乗つて、勘左の家を訪問することになる。行つて見ると、勘左が本気になつて船を造り始めたという。

しかもその仕事場は山の中だといふ。丸子は耳無の案内で勘左の仕事場に向かう。そこは、蠶家からさらに奥に入った山中であつた。勘左はそこで彼自身の考へる箱船——百石船の材料を刻んでおり、訪れた丸子に、その仕事に誇りを持つてゐることを語る。その夜は満月に近い月の明るい夜であつた。

(月光)

その年の春は寒い春であつた。あるスキー大会で優勝したスキーヤーの取材のために羽田空港に向かつた丸子は、そこではからずも蠶を見かける。だが、取材に手間どり蠶をつかまえることができず、蠶は外国へと旅立つてしまふ。そのころ七条みやこの持ち込んできた問題の一つに、三月十五日のみどりの誕生日を盛大に楽しくやりたい、ついでにはぜひ参加協力してくれといふのがあつた。しかし、丸子の仕事の都合もあり、結局その日は上野動物園に行くことになる。そしてそこで一匹の虎の子と、その飼育係大城寺之進と出会う。ところが虎の子の首にも、蠶の渡したカメオがぶら下つてゐたのであつた。(幼い虎)

四月の初め、丸子は勘左からの手紙を受け取つた。そこには、ハコ船の船首の部分を組み立てて琵琶湖に浮かべてみた、ついでには丸子にも立ち会つてもらへまいか、といった内容が書かれてあつた。丸子はいろいろ考へた末に、七条みやこ、みどり親子も連れていくことにした。その当日、皆を待

つていたのは蠶の訃報であった。外務省から役場に入った電話によると、蠶はアフガニスタンの山中の雪の上に倒れて死んでいたのである。進水式はたちまち蠶の追悼式に変わった。勘左が魂をこめて削った箱船の材料を浜辺で燃やしなから、それぞれが蠶の追悼をするのだった。その中で丸子は、蠶を追ったこの七ヶ月の間、自分はすばらしい夢を見ていたのだと思っていた。(焰)

括弧の中に書き入れたのは、各章の題名である。この小説は従つて八つの章から成り立っている。それぞれの章を要約する形で長い梗概を書き連らねてきたのには、それなりの理由がある。その一つは蠶という人物の表現の仕方が特異であるということ。もう一つは主人公が誰かという問題である。

蠶が実際にこの小説に登場するのは二回だけである。一回は「しらゆう花」の章、そしてもう一回は「幼い虎」の章。あとは、すべて勘左工門、刈浦茂平、盲目の老婆、七条みやこ、大城寺之進の目によつて捉えられ、語られている。そのために主人公のようでありながら、そう断定することを躊躇させるように造形されている。一方、梗概を読めば明らかのように、丸子東平こそ各章に登場して蠶を追い求めるその姿に、主人公としての資格を与えられているように読み取れる。ところがこの小説の主題を考える時、果たして丸子を主人公として考えるべきかどうか問題になってくる。

『四角な船』を発表する前に、『夜の声』を発表している。後者の主人公は疑いようもなく、狂人になるこ

とによつて世を正そうとする千沼鏡史郎という登場人物であった。作者は、ほぼこの人物を視座として『夜の声』を書いている。従つて、『四角な船』においては、意図的に狂人蠶を視座とすることを避けたと考えられる。それ故、蠶の造形方法は作者の意図と考えた方がよからう。この点を明らかにするために、各章の梗概を取上げて述べたのであった。そこで次章では、蠶がどのように造形されているのかを、具体例を挙げながら探ってみよう。

## 2

前章でも述べたように、この小説で蠶が丸子東平の前に姿を現わす場面は二回しかない。その他の場面では、丸子は他の人から蠶の噂を聞くばかりである。丸子が最初に会った船大工の勘左工門は、以下のように蠶を紹介していく。

「(略) そりや、素直な、いい若や。あんないい若つて、あるもんやない」

「もう四十は越さはつたやろう。四十二、三かな。怖いもんや。あんまり頭がええとああいうことになる。あんまり勉強しなすつたから、あんなことになつた」

「(略) おたきさんという女が食事の世話をしているが、そのおたきさんにきくと変じやないという。(略)」

「わしはやつぱり変だと思ふ。地球上の人間がみんな溺れてしまふような洪水が来るんで、その時の用意に船を造つてくれと大まじめに頼みに来なすつた。正気の人間の口からは、

めつたにそういう言葉は出んもんや。だが、それ以外は変じやない。どこか変っている筈だと注意してみても、いっこうに変なところはな。強いてあげれば、めつたに口をきかんぐらいのことやが、若の場合は、子供の時から無口だった。

——お前さんに、今日判断して貰おう」

蕨をこのように紹介する勘左に丸子は、船を本気で造る気かと質問する。すると勘左は、「本気じゃないが、子供騙しは造れん。そういう点、ごまかしの利く相手じゃない。本を読むんで困る。いまは船の本ばかり読んでいなさる。(略)造船関係の本も読めば、帆の研究書も、櫓の研究書も読んでなさる。ドイツ語か英語が知らんが、みな横文字の本ばかりや。

(略)と答える。丸子は、なるほどそれは厄介だと思ふ。

右の引用によつて分かるように、勘左の語る蕨は狂人であるよりはむしろ正常人、しかも優れた人間である。ただ、洪水幻想に襲われているがために、異常なのである。

勘左の案内で丸子は蕨家に着く。そこには蕨の世話をしてゐるおたきさんがいる。彼女は蕨のことを、「何もかも優しくおす。お茶を運んで行くと、ありがとう。部屋掃除をしても、ありがとう。食事を知らせに行つても、ありがとう。

召使に、いちいちそんな礼を言う人おますか。おまへんやろ。夜、窓から星を見ると、ああ、きれいだと云はる。散歩しておみなえしを見ると、これもきれいだと言はる。何を見ても、きれい、きれいな言はる。今時、ああ、きれい、なんて言うひとおますかおまへんやろ。あんなさんは言うてです

か」と言う。この科白の裏に、現代人に対する作者の批判が潜んでいるのは勿論であるが、小説の文脈で言えば蕨のすぐれた正常性を裏打ちすることはなっている。

やつとのことで丸子は蕨と会う。蕨は「ズボンとセーター姿で、長くのぼしている髪はひどく乱れてい」た。丸子は向かいあつて話をしてゐるうちに、「なんだ、まともではないか(略)変なところなど、みじんもない。おだやかな人物である。(略)身なりは若い恰好をしているが、やはり四十歳の声をきいた人の持つ落着きを持っている。」と思ふ。

そしてさらに「こんな狂人があろうか(略)若くて、如才なくて、しかも頭のきれる大学教授とでも話している」ように感じると、ただ、度々手を洗いに立つことと、勘左に箱船を頼んだことだけが異常だった。しかし、ついにそのことは聞くことができなかつた。

丸子が二度目に蕨に会うのは、既に梗概に述べておいたように、羽田空港においてである。その男が蕨だと分かつたのは、手の洗い方があまりにも丁寧すぎたからであつた。しかし、二人は話し合うこともなく別れてしまふ。従つてこの小説では、読者も二度しか蕨に会うことはできない。そして丸子東平同様、他の登場人物の語りにも耳を傾けるしかないのである。勘左は言う。

「(略)わしだつて、若は狂つてゐると思つてゐる。ただ、狂つてはいるが、どうも若の考へてゐることは誰よりもまともじゃないかと思ひ出している。もしかすると、若だけがま

ともで、若以外の人間の方が狂っているかも知れんと思いたいくらいじゃ。(略)

次に佐渡の刈浦茂平と丸子の会話。

「一体、ここに腰かけて、何をしていたんです、彼は」

「何もしていませんが、——あの人のすることは一つしかない。本を読みなざることだ。あなたさんもご存知でしょうが、毎日、毎日、難しい本を次から次に読みなざる。えらいもんじゃ。一体、あの人は、どういう学者かな。——あなたは知ってなさりましょう」

「知ってますが、何と言ったらいいか、どうも、困りましたな。」

丸子が言うと、

「とにかく、えらい人でしょう」

「そりや、えらい」

「そうでしょう。えらくなかつたら、あれだけ勉強はせん。大学の先生ですか」

「いや、大学の先生はしていません」

「そうでしょう。ああいう先生を使いこなす大学は日本にはありません。本を書いていますか」

「書いてはいません」

「そうでしょう。本を出したって、判る人が居りませんが。——なあ、あの人の言うことや、書くことが判ったら、それだけでたいへんなことです。そんな人は、今の日本にはめったにおりません」

茂平は言った。

作者はこの後に、「たいへんな傾倒の仕方である。勘左の比ではなさそうである。」と書き添える。これは登場人物丸子東平の感想として書き添えられたものであるが、この表現法は、小説のそれであるよりは伝説の表現法に近い。なぜならば、丸子（それは読者でもあるのだが）の前に姿を現すことのない藁が、行く先々の複数の人々に、信仰に近い気持でもって語られていくのだから。たとえばその次の刈浦と丸子の会話には、それが端的に示されている。

「ちよつと訊きますが、——変なところはありませんでしたか」

「変なところと言うと」

「普通の人と変わったところですよ」

「そりや、大あります。何もかも、変ってなさる変ってるところが、また、何とも言えますまい。あれは、神さまですよ」

「なるほど、神さまですね。ただあの神さまは、どこへ行くか、行先が判らないで困る」

丸子は言った。

右の二人の最後の会話で、藁を歩き先の分からない神さま（というのはいささか笑いの込められた比喻でもあるのだが）だとするところに、藁の伝説化が認められるのである。刈浦茂平はさらに、藁の影響を受けて現代の洪水伝説の必然性を滔々と語っていく。それを聞きながら丸子は、どこからどこ

までが刈浦茂平の意見か判らないが、「こうなると、遠大な思想家というほかはない」と茂平のことを思うのであった。そうしてそう思う丸子もまた、勘左や刈浦茂平同様、蠶の投げた網に捕えられて、蠶伝説を同僚に語ることになるのである。

『四角な船』が上梓された当時、高橋英夫は雑誌『波』（昭和47・八月号）に「寓話となつていく現代」と題して、この小説の書評を書いている。その中に次のような一節がある。

（略）井上氏の歴史小説は、運命のもとでの人間の生死を凜烈な情感でえがきだすもので、歴史の必然をつよく印象づけずにはおかないが、『四角な船』は、主人公蠶の若の見えざる姿が示しているように、歴史が寓話になつた小説といえるのではなからうか。いや、もう一ひねりして言えば、現代とはこれから歴史になつてゆくものとして存在しているのではなく、寓話になつてゆく時代としてあるのではなからうか。

『四角な船』を「歴史が寓話になつた小説」として捉えている点、たいそう興味深く、示唆に富む批評である。だが、これまでに見えてきたように、そしてこれからも見ていくように、この小説は寓話というよりも、むしろ伝説になつた小説といった方が、より適切ではないかと考えられる。なぜならば、作者は、現代の洪水伝説を語っていく狂人蠶を、伝説の表現法に則つてえがいていくのだから。

蠶から古代文字の乗船証の入ったカメラを貰つた刈浦家の盲目の老婆は、蠶のことを「いいお方ですものな。あんない

いお方はない」と言い、「いいお方だった。何をなさつてお方か知らんが、めつたにないいいお方だった。わしのことを褒める人などないのに、あの方はわしのことを、会う度に褒めて下さつた。えらい、えらいと言つて下さつた」と語る。しかし蠶は既に姿を消し、佐渡にはいなかったのである。

### 3

当時蠶に興味をもつて取材に出かけた丸子東平であつたが、第五章にあたる「古代文字」の場面では、同僚の瀬宮に以下のように言うほど、蠶の影響を受けてしまう。

「俺はこの事件に対しては新聞記者でなくなつてゐるんだ。取材の気持なんて、さらさらない。何となく蠶を応援したくなつてゐるだけだ。勘左という船大工はせつせと船を造つてゐる。蠶はそれに乗せる人間を探しに神聖な旅にのぼつてゐる。二人とも忙しいのだ。俺は俺で、何かしてやらなければならぬ」

他人にこのような濃い影を投げかける主人公の表現は、やはり伝説の手法によるほかはあるまい。なぜならば、伝説の手法を用いることによつて、やつとリアリティが獲得できるのだから。逆に言えば、もしこの小説で『夜の声』と同様普通の手法を用いていたら、主人公が巨人化し過ぎてリアリティを失つてしまつていただろう。ここに『四角な船』が小説として成功した鍵があつたのである。

さて、蠶は他の登場人物の内面において、次第に大きくな

っていく。その一例を挙げてみよう。

ある日勘左から丸子に電話がかかり、蠶の東京の住所が分かったという。そこで丸子は蠶を訪問する。ところが、蠶は丸子と入れ違いにどこかへ消えてしまう。その後の勘左と丸子の電話のやりとりである。

「どうでした？」

勘左は、丸子がうまく蠶を捉えることができたかどうかを訊いてきたのであった。

「だめでした。こんども入れ違いでした」

丸子が答えると、

「そんなことではないかと思っていた。若は普通の人ではありませんからね。洪水をも予知するくらいだから、あんたが行くぐらいのことはすぐ勘づいてしまう。自動車で行ったんでしよう」

勘左の会話では、蠶は超能力（予知能力）を持った伝説上の人物となっている。丸子はこの勘左の認識を逆手にとつて、次のように勘左に逆襲する。

「問題はそんなことではないんだ。僕が訪ねて行った時には、もう引き揚げてしまっている。問題は電話だと思ふ。あんたが電話をかけるのを、若はみんな聞いているんですよ。

大体、電話をかけるのに、あんたはいつも声が大きい。今でも大きい。これじゃ、みんな聞かれちゃいますよ」

実際にはこんなことはあり得ない。にもかかわらず、勘左は「ほんに、なあ」と急に声を小さくするのである。(注1)

ところで、消えた蠶に代つて登場してくるのがホステスの

七条みやことみどり母子である。みやこは蠶のことをラカちゃんと呼んでいる。作者はこのみやこの視点から蠶をえがいていく。丸子とみやこの会話を挙げてみよう。

「一体、ここで何をしていたんです」

「勉強よ、学者でしょう。昼はずつと勉強」

「夜は？」

「夕方から夜中まではみどりちゃんのお守り。みどりちゃんっていうのは、わたしの子供で、いま眠ってます。(略)

みやこはさらに読けて言う。

「ラカちゃんに居なくなれると、わたし、それが一番困るんです。ああいう人に預けておけば心配ないでしょう。日に何十回も手を洗うくらいだからきれいだ好きですし、育ちがいいから子供をちゃんとしつけます。わたしなど、母親という名だけで、育ちが悪くてがらがらでしょう。だから、あの人に預けておけば心配ないでしょう。」

「そりや、変つてますけど、学者つて、みんなあんなんでしょ(略)」

「(略)大体、自分の夫にしているような男なんかこの世には居ないと思うわ。もしいるとすれば、まあ、ラカちゃんぐらいのもんですけど、(略)」

みやこの話によると、蠶はみどりが将来大音楽家になると太鼓ばんをおしたという。彼女の、蠶の予知能力に対する信

仰は絶大で、丸子に「(略) 神さまの言うことも、仏さまの言うことも、あんまり当てにしません、ラカちゃんの言ったことは信じます。(略)」と言っている。

さてこのころ、勘左は蠶の影響を受けて本気になって船を造り始める。勘左の内儀さんの依頼で、蠶家の近くの山中に勘左を訪ねた丸子に、彼は以下のように話す。

「わしはな、丸子さん、生れて初めて仕事らしい仕事をしている気持がしてま。(略)——わしは沈まん船を造っている。大洪水の時、どうしても人類のために生きて貰わんならん人を乗せる船を造っている。夢中になって当り前やがな。ええ気持だぞ。だれも、日本の船大工で、わしのような仕事を請け負つは奴はない。これも蠶の若のお蔭やと思つとります。(略)」

右の会話で分かるように、勘左は生き甲斐として、損得抜きで船を造り初める。これは蠶の影響力の偉大さを示すものである。と同時に、この影響力の偉大さを読者に納得させるためにも、作者は蠶伝説を創る必要があったのだ。

もう一人、蠶を語るために登場するのが、虎の飼育係大城寺之進である。蠶を語る彼の会話を抜き出してみよう。

「何という人ですかね。私がこの虎の子を育てている時初めて会ったんですが、ひどく感心してくれて、それから毎日のように虎を見にやってきました。世の中には変わった人が居ますよ」

「それが、あなた、子虎ばかりでなく、親の方をも見るん

です。まあ、虎好きというんでしようね。私の方は毎日虎の世話をしているから、自然情も移りますが、その人のは、そ、じゃない。ただ虎が好きなんです。(略)」

「それも朝来て、晩まで居るんです。私の行くところについて来るんです。そうですね。一日か二日、姿を見せない日もありました、それ以外は、毎日いっしょでした。一体、あの人は何の研究をしているんですか」

「私は、どうも、動物の心理でも研究しているんじゃないかと思えますね。でなかったら、あんなに倦きもしないで、虎の檻の前に居ることはできませんよ」

蠶が虎を好む理由はどこにも出てこない。が、大城が丸子に話す次の会話に、その理由が潜んでいるように思われる。

「(略)一般に虎はライオンより気難しいと言われています。そのくらいだから、嘘は言わないし、素直だし、思慮はあるし、判断も正確です。相手の立場に立って物を考えるし、遠慮深いところもあり、謙遜でもある。竹を割ったようなすつきりした性格で、義侠心もある。恩義のためには、いつでも生命を投げ出すでしょう。」

大城はさらに七条みやこに、

「そうですね、あのひとは、無心な汚れないものが好きですからね」と言っている。

#### 4

最終章の「焰」では、アフガニスタンの山奥で、蠶が死ん

だことを読者は知らされる。それを聞いた七条みやこは、

「いいえ、判ります。わたしには判るわ。はつきりと判るわ。あの人のことは何でも判るわ。あの人が外国へ行つたと聞いた時、もう日本にはあんまりいい人が居なくなつたので、外国まで人探しに出掛けたんだと思ひました。そうに違ひないんですもの」と言い、

「もう、これで世の中もお仕舞ね。あんないい神さまみたいな人が亡くなるようでは、もう世の中も終りね。わたし、琵琶湖に飛びこんでしまいたくなつたわ。——みどりちゃん、二人で飛びこんでしまひましょうか」と言う。そして、蕨は狂つていなくなつた、と繰り返すのであつた。

このように七条みやこや勘左は、蕨はまともだつたと言ひ、耳無は少し異常だつたと言う。そこで丸子は「確かに耳無の言うように狂つている。しかし、また確かに勘左や七条みやこの言うようにまともなのである。この世に較べるものなのいほどまともであるに違ひない」と思うのであつた。

勘左の内儀さんは、蕨を追想して、

「(略)——それにしても死なれてみると、蕨の若という人は、気持のきれいな人でしたね。あんなきれいなことを考へていた人は、この世に二人とおまへんやろ。世の中のことを本気で心配して、洪水、洪水と大騒ぎして、とうとう雪の上でこごえて死んでしまつた。天国へ行きますやろな。あんな人が天国に行かんかつたら、ほかに天国へ行く人おまへんやろ」と言い、おたきさんはおたきさんで、

「旦那さん、遠くの知らん国に行かはつて死んでしまわれましたな。あんたらしゆうおす。そうは言うても、わてはままだ、本当はあんたさんが死んだとは信じとりません。本當でつせ。あんたさんは狂人の振りをするのがうもうおしたから、こんどもまた騙さはつたと違ひますか。よう度々、わてを騙さはりましたな。でも、あとで考へると、本當に胸のすつきりするような騙さはり方をされましたな。洪水が来るなんてみんな本當にしやありますがな。近頃では新聞にも、時々そんなことが書いてあります。うまいこと言うて、とうとう、あんたさん、新聞まで騙さはりましたがな」と蕨を追悼する。すると七条みやこも、

「そうよ、ラカちゃんは本當のことを言つて騙していたのね。大抵の人は嘘を言つて騙すんだけど、そこがあの人と違ふところね」と言つて蕨を慰むのであつた。

このように、『四角な船』の蕨は、複数の登場人物の視点によつて捉えられ、語られていく。丸子東平はそれらを統合した上で、蕨という人物を思い描くしかない。しかも、それは丸子のそれであつて必ずしも読者の思い描く蕨像ではない。

一人の人間の視点と意識には限界がある。神の視点を持つことは、それ自体に無理があつて、作品のリアリティを弱める。作家の工夫はそこから出発する。作者は蕨の造形を複数の視点によつてなすことを思ひつき、そうすることによつて『四角な船』の製作に成功したのである。

(注1) 勘左ばかりではなく、実は丸子も蠶に超能力が備わっていると思うようになる。第六章にあたる「月光」の章に、それが次のように書かれている。

「どうも、蠶は普通の人間ではないような気がする。異常な能力を具えているとしか思えない。俺が出掛けて行くと、入れ違いに彼の方はそこを離れてしまふ。佐渡の場合もそうだったし、こんどの場合もそうだ。偶然が二度重なったと考えればいいが、どうも、そうではなさそうな気がする」

右は丸子が瀬宮に言った内容である。それに対して瀬宮は、丸子が蠶の投じた網にかかっている、という。その瀬宮のことは聞いた丸子の感慨を、作者は次のように述べている。

網にかかっていると瀬宮から言われると、なるほど自分は網にかかっているかも知れないと丸子は思った。蠶にインタビューするために初めて彼の住む湖畔の町に出掛けて行つてからというものは、どうも彼から自由になることはできない。相手はたかが洪水の幻覚に襲われている狂人にすぎないではないかと思つてはみるが、どうもそこから離れることができない。蠶のことなど、きれいさっぱりと忘れてしまおうと思つのであるが、そこがどうもすつきりしない。瀬宮の網にかかっているという言い方が一番びつたりするようである。